

「おちからちぎれ」 1144 御田(平成11年4月3日)

親友



私には、親友と思える友人がいます。彼とは、大学で出会って、お坊さんになるための三十五日間の修行も寒苦百日の荒行も互いに励まし合い、心を支え合いつつ乗り越えてきました。厳しい修行と共に耐えぬいたというところに強い信頼関係が生まれ、苦しみも喜びも一緒に味わう中で友情を深めこきたかけがえのない友人です。

その彼が、昨年十一月一日から今年の二月十日までの百日間、再び荒行に入り厳しい修行に挑んでおりました。先日、見事に荒行を終え、仏さま、檀信徒、家族に、無事に修行から帰ってきたこともお伝えする帰山奉告式(まごんほうこうしき)が営まれ、私も参列させていただき、皆さまと一緒にお祝いしてまいりました。

感動

こんなに感動したのは久しぶりでした。水行が始まり、彼が声を出した瞬間、私の身体が震えました。私を知っていた今までの彼とは大きく違つ。腹から出る声に力がみなぎっており、ひと声ひと声がびに響き、その声に惹かれています。

水行を終え、共にお経を読むと、彼のお経の力強さにどんどん引き込まれていき、自分の心が高揚していくのが分かります。一緒にお経を読むその時間が、とても心地よく楽しいのです。彼が仏さまに帰山奉告文を読み上げます。彼が荒行で感じた苦しみや葛藤、檀信徒への想い、先師に対する思い、仏さまへの感謝と誓い、その心もが本心に素直らしく、彼の氣持ちが込められた言葉に流れていくような涙を私は必死に堪えていました。一緒に成長していると思っていた彼は、いつの間にか私よりも遥かに大きく成長していった。そのことを喜びと同時に「負けていけない」と私の心に火がつかしました。

誓い



彼には、とても可愛く素敵な奥さんがいます。荒行に入ったのは彼ですが、お寺の御守と守る奥さんにとっても大変な修行となります。ましてや結婚してまだ一年。奥さんの心労を考えると胸が苦しくなります。式典で奥さんは泣いていました。今までの想いが溢れてきたのだと思います。最後の謝辞で、住職がこのように挨拶されていました。「若上人にとっても嫁さんにとっても本当に厳しい修行だったと思います。この修行を通してたくさん人の御陰様を感じたことでしょうか。ありがとうございます。二人は、この感謝の想いでここからの関わり合いの中で皆さまに伝え、ご恩返しとしていくことでしょうか。」

親友夫婦の御目、新たなスタートの日に立ち会えたことと心から嬉しく思いました。そして、帰る間際、彼のお父さんからひと言葉。「息子は、あなたに自分、成長した姿を見て欲しかったのだと思います。だから、遠方にも関わりあうあなたに声をかけたのだと。私はそう感じています。果てなく、本心にありがとうございました。」

感謝するのは私の方です。こんなにも感動と刺激をいただいたのですから。

今年は、私が二回目の荒行に入ります。私も、彼に見てもらいたいと思える姿となって出てこよう。揺るかない意志を抱き修行に励んでいきます。仏さまにとうとう誓いを立て、浄泉寺へと帰って来たのです。